

教区教化テーマ 生活を聞法の場に—真宗門徒として—

教化テーマの願い

世に伝えられるような我々の生活は、家運隆盛・無病息災・商売繁盛等の現世利益を基本としている。この基本に立ち“世間さま”に恥ずかしくない日々を送ることが美德とされる。

こうした至極当たり前の現実生活に、あえて疑問を投げかけるのが宗教の意味である。この問題を如来からの問いかけと受けとめると、「真宗門徒としての生活とは何か」という言葉となって私たちの前に立ち現れてくる。

教区テーマの要は、混迷した真宗門徒の生活において「聞法」という基本に立ち返ることである。聞法とは如来との対話であり、自らの苦しみとの対話でもあろう。そこには法（教え）に自分自身を聞かずにおれない我が身がある。

自是他非の損得勘定ばかりに覆われていようとも、何かしら本当に求めなければならないことがあるのではないか。ふと、思いもよらぬ形で現れる問いに如来の願いを憶うのである。心を弘誓の仏地に樹てる生活がここに現実されてくる。

落ち着かない世の中であるからこそ、衣服を整え、心静かに掌を合わせて念仏申すことにしか自分自身に出会う道はない。

教化について

九州教区発足と同時に、組を基軸とした教化を展開すべく総合教化本部が設置された。“教区人自らが、教区の教化を担うものでありたい”との願いが込められていることを、改めて確かめておきたい。そして、それはそのまま、人と人との水平に出あっていることの体現とならなければならない。

教区における教化の方向性は、総合教化本部において各部門・各団体の諸事業の点検と見直しをもって常に確認・共有されている。事業の詳細については各部門等からの計画内容に譲り、各部門に共通する方向性を教区教化テーマと各部門計画との連繋という観点から述べる。

僧侶の学びと出あいは九州教区人としての真宗門徒の自覚を促す新たな場の創出となる。つまり生活の一コマ一コマが出あいの連続であり、それが聞法の素地となるということである。それは青少幼年との出あいへのサポートへ連動する。さらに「九州教区帰敬式実践運動推進計画」の展開を促し仏事と聞法生活が具体的に実感される、という形で方向性をここに確認する。

なお、以下に示す各部門における事業内容は表現に幅をもたせている。現実社会に向けた即応性と柔軟性のあらわれとしてご了解いただきたい。

以上